山本周五郎と藤沢周平の世界

——武家もの・下町もの作家の系譜——

田邉　匡

はじめに

二十一世紀に突入した平成十三年現在を基準にして振り返ってみると、山本周五郎が六十四歳でこの世を去ったのが、昭和四十二年（一九六七）のことであるから、没後すでに三十四年が経過し、その周五郎が得意とした江戸下町の庶民を主人公に描く、いわゆる「市井（しせい）もの」路線の後継者と自他共に認める藤沢周平も、平成九年（一九九七）に六十九歳で亡くなり、はや四年が過ぎたことになる。

ところでこの二人が残した数多くの名作、とくに周五郎の場合、近年とくに書籍の回転が早くなった出版界にあって、没後三十年以上も経過しているにもかかわらず、いまなお地方のどんな小さな書店に行っても、本棚の文庫本コーナーには必ずといっていいほど、かなりのスペースを占めて並んでいるということは、それらの本を買い求める世代を越えた周五郎と周平文学のファンが、根強く存在していることを証明しているわけで、その息の長さは驚嘆に値する。

そこで今回は、主に山本周五郎の世界を中心に、周五郎作品の魅力というか、一体どういうところが世紀を越えてまで読者をひきつけているのか、また藤沢周平の作品との共通点、大きく異なる点といった辺りに焦点を絞ってみてみたい。

一

山本周五郎の凡そ四十数年間に及ぶ創作活動を振返って見ると、ちょうど太平洋戦争敗戦年の昭和二十年（一九四五）を折り返し点に、前期と後期に区分して考えることが出来る。

つまり、彼の事実上の文壇登場作となった『須磨寺附近』（大15・4「文芸春秋」）から、太平洋戦争まっただ中、思想統制、経済的しめつけなどと作家にとって「暗い谷間の時代」と呼ばれた劣悪な条件下で、敗戦の年まで営々として、雑誌「婦人倶楽部」

を中心に変則的ながら、読み切り短編シリーズ全三十一編からなる『日本婦道記』（昭17・6～20・12）を書きつづけた、約二十年間を前期とすると、敗戦の翌年いち早く発表された、いわゆる「下町もの」の第一作となった長編小説『柳橋物語』（昭21・7「椿」）から、六十三歳でこの世を去る間際まで書きつづけていた未完の大作『おごそかな渇き』（昭42・2「朝日新聞日曜版」）で幕を閉じることとなる約二十年間が後期というわけである。このように見てくると、周五郎文学研究のキーワードは、ずばり言って前期は「武士」、後期は「庶民」と言うことになる。

一方、昭和二年生まれの藤沢周平の場合は、昭和二十四年三月に山形師範学校を卒業と同時に、四月から地元湯田川村の中学校に国語の教師として赴任したが、教員生活わずか二年で肺結核のため休職。その後八年間に及ぶ入院生活で、右肺上葉切除、肋骨五本を切除する手術を三回も行ないながらも無事退院する。昭和三十二年十一月から、友人の紹介で東京の業界新聞K新聞社に就職が決まり、通勤のかたわら、読売新聞が募集する短篇小説賞に応募したり、昭和四十六年四月には、六年越しの挑戦の末、『溟い海』で第三十八回「オール読物」新人賞を手にする。それから二年後の昭和四十八年七月には、『暗殺の年輪』で第六十九回直木賞を受賞し漸く文壇に認められた。作者四十六歳のことである。それ以後は平成九年一月、六十九歳でこの世を去るまでの約二十五年間に、先輩作家山本周五郎の四十六年間に比肩するほどの多くの名作を世に問うことになる。藤沢周平の場合、周五郎のように前期と後期と大別するのは困難だが、作家として文壇に登場した昭和四十年代後半から五十年代はじめにかけての初期の作品は、題名からもまた、作者自身がそれらの作品を「負のロマン」と呼んでいたことでわかるように、非常に暗い情念に閉ざされた内容のものが多かった。それが代表作の一つ『用心棒日月抄』（昭51・9～53・6）あたりからは、そうした暗い色調を脱し、「負のロマン」から「正のロマン」へと転換を果たし、その上ユーモアさえ伝わってくる一種のゆとりのようなものが感じられるものに変化したのも事実である。何はともあれ、藤沢周平自身、

> 山本周五郎が好きでしょうと言われる。私の心境は複雑である。私が市井もので出発し、作品の質が山本周五郎に似ているということを言うわけだろう。だが先輩作家の作品に似るということは困ったことでこそあれ、そう嬉しいことではない。（略）しかし、と思う。ここが困ったところだが、あの手この手で私が弁明を試みても、江戸市井もので山本周五郎はひとつの典型を描いてみせ、私もそこに典型をみる思いがしていることは事実である。これは偉大なことで、この偉大さからは逃れることは出来ないし、関係ないで済むことでもないと思う。[1]

と、はっきり言っているように、周五郎の視線の位置、庶民を見ていく眼、ものの見方という点では文字通り周五郎ブランドなわけで、そういう意味では、山本周五郎がいなければ……というよりもその前に、藤沢周平こと、本名小菅留治がもし肺結核に罹

らなければ、そして長い闘病生活のベットの上で、周五郎作品と出会わなければ、藤沢周平という作家はこの世に誕生していなかったのではないだろうか。ここにも人の運命と出会いという、一人の人間の力ではどうにもならない大きな力を感じずにはいられない。と同時にまた、評論家中島誠がその著『遍歴と興亡』（講談社　二〇〇一年）の中で、

山本周五郎、柴田練三郎、司馬遼太郎、池波正太郎、藤沢周平に代表されるような歴史、時代小説の黄金時代は、まさに高度経済成長時代からバブル経済が弾けるまでの三十数年間を席捲した。だが、これら作家たちは惜しくも物故した。まだそれほどの年齢でもなかったのに、揃って二十世紀の終わりをまたずに討死した。自分の力のすべてを出し尽して死ぬ、これを討死と言いたい。彼らの死で、歴史、時代小説の世界は一時、行灯の火が消えたように暗くなった。

と言っているように、たしかに藤沢周平の死は、国民的な作家、とくに時代小説の分野での時代が終わったと誰もが感じたことは事実である。

二

つぎに、山本周五郎が戦前に書いた多くの「武家もの」といわれる作品の集大成であると同時に、また周五郎の作品を系統的に読もうとする者にとっては、入門書の位置を占める重要な前期の代表作となった『日本婦道記』をとり上げ見てみたい。

周五郎が戦前に書いた作品の多くは、言うなれば自分が生きんがため、また妻子を養うため、求められるまま遮二無二書きまくったというのが実状で、そのほとんどが作者自身の意に満たぬ作品といってよかった。そうした未熟な若き日の売文を、周五郎自身常に恥じ続けていたということは、次の木村久邇典の回想によっても明らかだ。

最初に講談社から『山本周五郎全集』を出したとき、昭和三十八年ですが、（略）とくに戦前の作品については、「これだって収録していいじゃないですか」「これもいいじゃないですか」と言ってもだめなんですね。全部「みんな捨てろ」「みんな捨てろ」って。結局『日本婦道記』と『紅梅月毛』がわずかに入った。あれも私がわいわい言って、やっと復活させたもので、先生は「みんな、切れ」と言われたんです。[2]

そうした反省の上に立って、太平洋戦争まっただ中、東京の上空にも毎日のようにB29が焼夷弾を落しにやって来て、いつ死ぬかわからない文字通り極限状態の中で、その最後の締括りとして周五郎が、独自な自らの世界を、生命を懸け辛苦した一つの証が、この『日本婦道記』シリーズだったのだから、作者自身にとっても愛着を感じずにはいられなかった作品であったことは間違いない。

当時の軍国主義的風潮は、一方で日華事変や太平洋戦争を戦い抜いた男性たちの物語として、例えば火野葦平『麦と兵隊』（昭13）、石川達三『生きてゐる兵隊』（昭13）とか、丹羽文雄『海

戦』（昭17）、岩田豊雄『海軍』（昭17）など、国策に便乗した戦争文芸のいくつかの作品に華々しく登場し、その存在やら苦悩やらは数多く表現されている。それら男の栄光を「柱を支える土台石のように、いつも蔭に隠れて終ることのない努力に生涯を捧げ」（『松の花』）支えているのが、銃後を守る多くの婦女子たちの溢れんばかりのエネルギーであって、それは同時に真の意味での戦争の被害者ではないかと、周五郎は疑問の眼をむけそこにスポットを当てたのであった。

時節柄一応、国策的な要請に応えるようなポーズをとりながらも、実際には戦争とか平和とかにはまったく関係のない、彼がかねてから抱いていた女性観を盛込みながら、理想とする日本女性のあり方を、この『日本婦道記』シリーズの中に示そうとしたのである。だからここに描かれた女性たちは、社会制度の押しつける道徳に対して、身を正しく処そうとしているのではなく、まず第一に人間であること、人間の理想を正しく生きることを自らに課した女性として登場する。

『日本婦道記』第一作目『松の花』では、息をひきとったばかりの妻の手が、夜具の外にこぼれ出ているのを見て、夫である藤右衛門が、それを夜具の中へ入れてやろうとした時に、その妻の手がひどく荒れてざらざらしているのに気づく場面がある。これは周五郎こと清水三十六（さとむ）が四歳の夏、山津波で祖父母や叔父など親族を一挙に喪い、母と二人で父親をたずねて上京した時、伴ってくれた母親とくの手の感触が終生忘れられず、書きつけたものだと言われている。またこの妻女の死が、家士一同、しもべの女房たちに至るまで底知れぬ程の深い嘆きを与えていることを知り、藤右衛門は驚くと共に形見分けの段になって、残されていたものが、みな洗い清められてこそあれ、継ぎのあたった着古した木綿物であり、これが紀州家千石の老職を勤める妻が身につけていたものとは、想像もつかない質素なものであったため、「そのほかにはもうないのか、まったくこれでしまいなのか」と息子になかばあきれて問い質す。このように藤右衛門の疑問の前に、つぎつぎと生前の妻の慎ましい節約を旨とした親身な生活振りが示される。そして最後は「この婦人たちを忘れては百千の烈女伝も意味がない、まことの節婦とは、この人々をこそさすのでなくてはならぬ」という藤右衛門の呟きでこの『松の花』という作品は締括られるのである。

この『松の花』の女主人公やす女と、三作目の『箭竹』に登場する若き未亡人のみよの場合は、二歳の誕生日を迎えたばかりの幼児を一人で育てていく物語だが、この二人の女主人公は周五郎の母親とくをモデルにして書いたもので、これらの作品を通して貧苦の中にその生涯を終えた母親への鎮魂の意味をこめ捧げたものと思われる。

また、戦時下の物資不足が祟って病没した妻に対するこれまたレクイエムが、『日本婦道記』二十八番目の作品『二十三年』である。昭和二十年に入って空襲がひんぱんに行なわれるようになると、周五郎は膵臓癌のため回復の望みはないと医師から告げられ、日に日

に痩せ衰えていく病妻のきよいを励ましながら、原稿用紙とペンを片手に妻を防空壕まで背負っていく。その時背に感じたきよいのあたたかみを思い出しながら書きあげた愛の物語なのである。

『梅咲きぬ』という作品は、女が稽古事に打ち込みすぎると、家をあずかる妻として真の仕事がおろそかになるという姑の教訓話として、表面上は作者の言わんとするところは実にはっきりしていてわかり易い作品であると言える。だが、たったそれだけのことを言いたかったが為に、この作品を書いたのだろうかと、あまりにも簡単明瞭すぎて却って疑念が生じるのである。事実読者がこの作品を、もしそうとったとすれば、作者周五郎の意図に反するのではなかろうかと思われる面もあることを見落としてはなるまい。

加賀藩前田家に仕える二千石の重職、多賀直輝に嫁して三年になる妻の加代は、十一、二歳の頃から新古今調の和歌の手ほどきを受けていたこともあって、詠草の成績もめきめきとあがり、この道こそはぜひとも奥をきわめてみたいと自分でもそう思い、彼女のめざましい進歩は間もなくその奥義ゆるし允可を受けられるところまで来ていたのである。その加代に姑のかな女は、「わずかなあいだにたいそうなご上達です、これだけお詠めになればもう女のたしなみにはすぎたくらいでしょう、もうお歌はこのくらいにして、またなにか他の稽古ごとをおはじめなさるのですね」という。「加代さん、私が芸ごとをつぎつぎに変えたのは、移り気からだとお思いになりますか」「家政のきりもりに怠りがなく、良人に仕えて貞節なれば、それでおんなのつとめは果されたと思うかも知れませんが、それはかたちの上のことにすぎません。本当に大切なものは、もっとほかのところにあります。人の眼にも見えず、誰にも気づかれぬところに……」そして姑かな女がいうところの「それは心です」「おんなのつとめ」とはそれはつまり「いかによく生きるか」ということであって、「よく生きる」ためには爽やかに回転する家庭であることが前提となるというのだ。つまりあくまでも「よく生きる」ことを周五郎はこの作品で一番の問題としているのである。

いま一つ『桃の井戸』（琴女覚書）という作品では、先妻との間に七歳と四歳になる子供のある萩原直弥のもとに、後添いとして嫁いだ若い琴女という主人公が、まま子と自分のおなかを痛めた子を、どうやって分け隔てなく育てようかといった、母親としての葛藤を描いた作品であるが、その縁談のあった当初後添いにゆく気持など些かもなかった彼女が、長橋のおばあさまの意見を聞きにいったところ、「あなたはお嫁にゆかないおつもりですか……、あなたは歌を詠んで一生をおすごすお考えかも知れない、それだけの才をもっておいでなのだからそれも結構でしょう……、けれどもすぐれた歌を詠むことと、結婚することとを別々に考えてはいけませんね。おんなは良人をもち子供を生んで、はじめて世の中というものがわかり、本当のかなしみやよろこびがどうあるかを知るのです。……いつぞや力んだ考えかたをしすぎると申上げたが、それは独り身をとおそうという気持が根になって、ささいなことにもすぐ肩肱を張る癖がついているからです。それでは格調の正しい歌は詠めても、人の心をうつ美しい歌は……」

とか、「おんなには誰にも共通な夢がひとつあります。言うまでもなく結婚です。むすめでいるうちは考え得られるかぎり美しい空想で飾り、ほぐしてはまたもっと美しく飾りあげる。おそらく誰でもそうでしょう。こんなことが実現される筈はないと知っていながら、自分からなかなかその夢が棄てきれない。そうしていには多かれ少なかれ失望を感じずには済まないのです。なぜなら、むすめたちが空想するような美しさは在るものではなく、新たに自分がきずきあげるものだからです。夢のゆきついたところに結婚があるのではなくて、結婚から夢の実現がはじまるのです。それも殆んど妻のちからに依って……」と、ここでも『梅咲きぬ』の姑と同様、おばあさまがお琴を諭すくだりがある。そのため、

この『日本婦道記』シリーズの中で、登場人物に一番血肉が通っていて好きな作品なのだけれど、この長橋のおばあさまという人がしゃしゃり出て来て一説ぶつため、結局他の作品と同じようなパターンになってしまい、非常に惜しまれる。[3]

といった、直木賞作家、杉本章子のような意見も出て来るわけだ。この様に『日本婦道記』全編を貫くテーマは、「夫婦」とは何か、「人間」とは何か、「愛」とは何か、という問いかけと同時に、十九番目の作品『蜜柑畑』に示されたように、「人を愛するということは耐えること」であり、「人間は信じ合わなければならない」という周五郎なりの観念的な命題を、ある種の優しさをもって読む者に訴えているのである。

ところで、この『日本婦道記』シリーズが「婦人倶楽部」という女性雑誌に掲載されたという点に注目したい。なぜなら実際、戦争中に女子挺身隊員として、軍需生産現場へかり出された多くの女学生たちにも愛読され、その愛読者の中には、作者が危惧したような的はずれの批評が皆無だったわけではない。そこで周五郎としては、そのことがよほど気がかりだったのと、また同時にこの作品にそそいだ作者自身のきわめて強い愛情を物語るものとして、次のような一読者に対して述べた言葉が非常に印象的である。

ときどき『婦道記』について、あれは教訓で、女だけが不当な犠牲を払っている、ということをいわれるのですが、私はそれは非常に心外なので、もう一度よく読み直して頂きたいと、よく申し上げます。あれはむしろ世の男性や、父親たちに読んでもらおうと思って書いたもので、小説自体の中では女性だけが特別に不当な犠牲を払っているようなものは一編もないと思います。日本の女性の一番美しいのは、連れそっている夫も気がつかないというところに非常に美しくあらわれる……、これが日本の女性の特徴ではないかと思ってあの一連の小説を書きました。日本の女性はしとやかで大変おとなしく、夫に仕え、親に仕え……、それは事実でしょうけれども、しかしもし不当な犠牲を強いられたら、日本女性だって、そんな不当な犠牲に甘んじている筈はありません。私はそうではなく夫も苦しむ、その夫が苦しむと同時に妻も夫と一緒になって一つの苦難を乗り切って行く、という意味で、あれだけの一連の小説を書いたのであります。[4]

まさにこれが『日本婦道記』シリーズ全編に通じるところの主題である。「泰平」の世にも、「戦乱」の時代にも、女性の生き方を、つまり婦道をただすことに作者の意図はあったと言える。そのことは換言すれば、作者周五郎の女性に対して抱く浪漫主義に由来しており、その周五郎の女性に対して抱くロマンティシズムとは、前述した如く生みの母親とくと、昭和五年に結婚し敗戦の年に死別した最初の妻きよいの、二人の女性の生き方に影響され、培われたものであることは明白である。いずれにせよ、昭和十七年から二十年という半世紀以上も前、しかも戦時下に書かれたこの『日本婦道記』という作品に登場してくる女たちの肖像が、人間としてごく自然に生きている女性たちであるが故に、世紀を越えた今日読んでも、なお色あせていないという事実は、注目に値する。

なお、この『日本婦道記』は昭和十八年上期の第十七回直木賞受賞作に決まったのだが、「名誉などほしがらず、自分なりの筋を通そうとする強情さ、狷介不屈なすね者」[5]で知られた曲軒こと山本周五郎をして、潔く自分の方から辞退するといった面目躍如たる行動に出たのである。

「こんど直木賞に擬せられたそうで甚だ光栄でありますが、自分としてはどうも頂戴する気持になれませんので、勝手ながら辞退させて貰いました。この賞の目的はなにも知りませんけれども、もっと新しい人、新しい作品に当てられるのがよいのではないか、そういう気がします。」[6]

周五郎は、その後も『樅ノ木は残った』（昭29～31）が昭和三十四年度毎日出版文化賞に、更には『青べか物語』（昭35）での昭和三十六年度文芸春秋読者賞と、数々の価値ある賞の受賞対象となりながら、「私はつねづね各社の編集部や読者や批評家諸氏から、過分な賞を頂いていることでもあり、そのほかにいかなる賞もないと考えておりますので、ご好意にそむくようですが、つつしんで辞退いたします」[7]といって、生涯賞と名のつくものはすべて辞退し通したのである。

三

つぎに、山本周五郎と藤沢周平、この二人の共通点と、ここが大きく違うという面で少し見てみたい。

二人の共通点のまず一点目は、周五郎は山梨県北都留郡初狩村（現大月市）の出身で、周平は山形県東田川郡黄金村（現鶴岡市）の出身と、いずれも地方から東京へ出て来た俗にいうおのぼりさんと呼ばれる地方出身者であることだ。但し、周五郎が四歳の時、母に伴われて東京に出て来て以来、故郷を捨て一度も郷里には帰っていないのに比べると、周平の場合は、作家になってからも故郷の鶴岡市に何度も取材にいったり、依頼があるたび講演に出かけたりしているところが違う。

共通点の二つ目は、周五郎も周平も、最初の妻には幼児を残して先きだたれ、再婚した相手にめぐまれ作家として大成したという点である。周五郎の場合は昭和五年十一月、彼が二十七歳のと

きに、宮城県亘理町出身の土生きよい二十一歳と結婚。そのきよいが昭和二十年五月に、四人の幼い子供たちを残してこの世を去る。享年三十六歳であった。翌二十一年一月、周五郎四十三歳の時、当時周五郎の住んでいた馬込村の家の筋向いに両親と妹の四人で住んでいた吉村きんと再婚する。彼女は幼い頃から根津や本郷金助町で成長した、ちゃきちゃきの江戸っ子で、このきんさんと妹をモデルにして書いたのが『おたふく』（昭24）『妹の縁談』（昭25）『湯治』（昭26）とつづくいわゆる『おたふく物語』シリーズである。また先妻が残した幼い四人の子供たちを立派に育てあげた点では、『柳橋物語』の中で、みなし子の幸太郎を自分の子として育てるおせんや、『ちいさこべ』（昭32）の中で、火事のため肉親を失した大勢の罹災児たちの面倒をみる、勝気でしかも母性ゆたかなおりつを彷彿させるものがある。まるで魚が水を得たように、戦後の周五郎が「下町もの」で、めざましい作家活動を開始したその裏には、このきん夫人の蔭の力が如何に大きかったかは、生前周五郎自身が「ぼくの小説の半分は、かあさんのおかげで書けたんだ」（大平陽平「周五郎の庶民性」）と夫人に述懐していたことでもわかるのである。

一方、藤沢周平は昭和三十四年八月、三十二歳の時、ちょうど十年前に彼が教職についた湯田川中学校で、最初に担任したクラスの教え子だった、鶴岡市大字藤沢に住む三浦悦子二十四歳と結婚する。彼の藤沢周平というペンネームは、妻悦子の出身地からつけたもので、周平の周も夫人がかわいがっていた甥っ子の名前である。愛妻悦子は三十八年二月に長女を出産したが、その年の十月、進行性の癌のため二十八歳の若さで死去。昭和四十四年一月、周平四十二歳のとき、江戸川区小岩に住む高沢和子と再婚する。その時の彼の心情は、自叙伝『半生の記』（平6）に次のように記されている。

昭和四十四年一月に、私は現在の妻高沢和子と再婚した。私はそのころ病弱な老母と幼稚園に通う娘をかかえて疲労困憊していた。再婚は倒れる寸前に木にしがみついたという感じでもあった。（略）和子は官吏の娘だが東京の下町生まれ下町育ちで、飾らない卒直な物言いをする女だった。（略）彼女の本性は生まじめで人の面倒見がよく、思いやりが深いところにあった。彼女は死んだ先妻のことも、血の繋がらない娘のことも苦にせず、まとめて面倒をみるふうがあった。和子は私の家の状況を見さだめると、右に老母左に娘の手をひいて銭湯に連れて行き、車を呼んで病院に連れて行くことからはじめた。

そして藤沢周平の場合も、そんな下町育ちの和子夫人をモデルに、藤沢作品に登場する多くの女性の中でも特に『遠ざかる声』（平2）のおまさを筆頭に、女は若さや見かけの美しさではない、すべてをわきまえ順境にあっても苦境にあっても、しなやかに逞しく、そして黙々と生きている、そんな女がやはり一番いい女なのであるといった、気のいい裏店のおかみさん連中を生きいきと描くことが出来たわけだ。

共通点の三つ目、それは前述した如く、舞台を江戸の下町に設定して、名もない町家の男と女の人生のささやかな出来ごとを描く市井ものを、多く手がけた両者の作風が非常に似ているという点で、言うまでもなくこれが最大の共通点である。ところが呼び名は同じ「下町もの」あるいは「市井小説」であっても、周五郎と周平の小説作法のあいだには、かなりの開きがあることも事実である。

「どんな人間だって一人で生きるもんじゃあない、わたしたちだけじゃなく、さぶちゃんや、おのぶさん、おすえちゃんのことを忘れちゃあだめだ、おまえさんは決して一人ぼっちじゃあなかったし、これから先も、一人ぼっちになることなんかあ決してないんだからね（略）生れつきの能を持っている人間でも、自分一人だけじゃあなんにもできやしない。能のある一人の人間が、その能を生かすためには、能のない幾十人という人間が、眼に見えない力をかしているんだよ、ここをよく考えておくれ、栄さん」　（『さぶ』十三の五）

名作『さぶ』（昭38）には、人足寄場をまもることこそ自分の使命であるかのような錯覚におちいり、自分ひとりで困難に立ち向かおうとする栄二に、作者は登場人物の一人である与平爺さんにこう語らせるところがある。周五郎の場合、このように作中に人間観、人生論といった自分の信念を盛ることを殊更好む傾向が強く、登場人物の口を借りたり、ときには作者自身が膝をのり出してでも、人生の真実について講釈したり説教したりと、読者に堅苦しさを感じさせる場面に出喰すことがたびたびある。それに対して、人間の優しさと哀れさ、生きることのつらさや心躍り、それらは精妙な描写を通じて読者に伝えるべきものであって、多弁を弄して説き聞かせるものではない――というのが信条の周平作品には、そうした作者の考えを読者に押しつけようとする堅苦しさは全然なく、実にさらっとした爽やかさで、読者は元気づけられ、心が癒されるのである。その辺のことを、中野孝次が秋山駿との対談の中で、

藤沢周平の時代小説をわたしが好んで読むのは、なにかひどく懐しい世界に帰ったような安らぎを覚えるからですよ。誰だって古き日本の真相なんて知るわけもないが、藤沢周平の描く世界に入るとどこかこういうのが昔の日本、昔の日本人か、という郷愁に近い感情、要するに辛抱とか忍耐とか、思いやり、慎み、羞じらい。そういう日本人の美徳が生きていた時代、人間「修行をする」ということばが生きていた時代をよび起させるものがあるからです。[8]

と的確に指摘しているように思う。藤沢周平のそうした市井小説作法が完璧なまでに生かされたのが、橋にまつわる十の切ない恋を描いた『橋ものがたり』（昭51）である。全編に共通した主人公こそいないが、いずれも隅田川をはじめ大小の川や掘割にかかる橋を舞台もしくは背景として物語が運ばれ、その橋を継ぎ手として、互いに独立した恋物語がしっかりとつなぎあわされていくあたりは、勿論内容的には全然違うが、構成上また代表作の一つという点で、

周五郎の『日本婦道記』に匹敵し、しかも好対照な作品である。新潮文庫『橋ものがたり』の「解説」で、井上ひさしが書いているように「梅雨どきの土曜の午後のひとときを過ごすのにはもってこいで（略）まことにすがすがしい甘さ。読み終えてしばらくは、人を信じてみようという気持になる」名作である。

そこでまた「藤沢作品のモデルは全部山本周五郎のコピーだとしても、一パーセントの独自性があれば、それは独自性だといえばいいんだ。そこが山本周五郎を超えた点だ」[9]と指摘する鷲田小彌太の意見にも納得がゆくのである。

最後に、ここが二人の大きく違うという点を一つ上げるとすれば、周五郎のかたくななまでの賞嫌いというか拒絶症とは反対に、藤沢周平の場合は、昭和四十六年の第三十八回「オール読物」新人賞を皮切りに、四十八年には第六十九回直木賞、平成元年には第三十七回菊池寛賞をそれぞれ受賞していて、平成七年には紫綬褒章も受章している。また昭和六十年からは直木賞、六十三年からは山本周五郎賞の選考委員にも就任するなど、新人発掘にも大いに貢献した点で違いは顕著である。

おわりに

周五郎、周平の二人とも短編も含めれば膨大な数になるそれぞれの作品も、内容的に大別してみると、周平の場合は七つ、周五郎の場合は九つのジャンルに分類することが出来そうだ。――別表参照――

二人のそれぞれの作品の中から、私のお気に入り作品ベストフアイブを選ぶとすれば、周五郎では『さぶ』『落葉の隣り』『赤

【参考】別表

山本周五郎	ジャンル	藤沢周平
『城中の霜』『松風の門』など	武家もの	『暗殺の年輪』『上意改まる』など
『樅ノ木は残った』『正雪記』など	史伝もの	『一茶』『檻車墨河を渡る』など
『燕』『女は同じ物語』など	下級武士の恋を描いた青春もの	『鱗雲』『麦屋町昼下がり』など
『おたふく物語』『落葉の隣り』など	下町もの・市井もの	『橋ものがたり』『本所しぐれ町物語』など
『さぶ』『ちゃん』など	職人人情もの	『思い違い』『驟り雨』など
『ほたる放生』『つゆのひぬま』など	岡場所もの	
	男と男の友情もの	『蝉しぐれ』『三屋清左衛門残日録』『用心棒日月抄』シリーズなど
『しじみ河岸』『五瓣の椿』など	一種推理小説ふう	
	周平捕物帳の世界	『獄医立花登手控え』シリーズ『彫刻師伊之助捕物覚え』シリーズ
『その木戸を通って』『屏風はたたまれた』など	一種不思議小説	
『虚空遍歴』『おごそかな渇き』など	宗教的傾斜を感じさせるもの	

ひげ診療譚』『日本婦道記』『樅ノ木は残った』であり、周平では『蝉しぐれ』『橋ものがたり』『用心棒日月抄』『三屋清左衛門残日録』『海鳴り』と、いったところになろうか。

注

（1）「周五郎さんのこと」藤沢周平『周平独言』中公文庫（一九八四年九月）

（2）木村久邇典・縄田一男対談「山本周五郎・人と作品」『別冊歴史読本』新人物往来社（一九九八年四月）

（3）杉本章子、宮部みゆき対談「周五郎の魅力は短編にあり」『別冊歴史読本』新人物往来社（一九九八年四月）

（4）「お便り有難う」山本周五郎『小説の効用』新潮文庫（昭三十五年五月）

（5）奥野健男『山本周五郎』創樹社（昭五十二年八月）

（6）「直木三十五賞辞退のこと」『文芸春秋』（昭十八年九月）

（7）『毎日新聞』（昭三十四年十一月三日付）

（8）秋山駿・中野孝次対談『美しい日本の人間』を書いた人」『藤沢周平のすべて』文春文庫（二〇〇一年二月）

（9）鷲田小彌太・広瀬誠対談「藤沢周平と時代小説の可能性」PHP研究所（一九九七年）

（たなべ・ただし　本学非常勤講師）